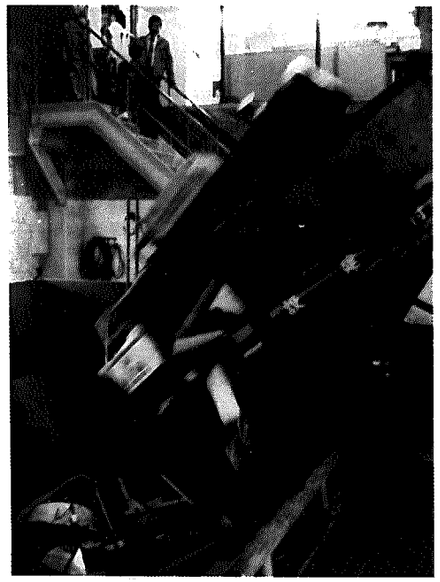
粗大ゴミ収集の日。あるいは文化的生活　の末路



◀亀田ゴミ焼却場のホッパーに粗大ゴミが落とされる

わたしたちは何を捨てているのか

もしもゴミの収集がなかったら…。ゴミを出す日には必ずいっぱいになっている我が家のゴミ箱を見ていつもそう思う。10月のある日、ゴミの行方を追ってみた。たまたまその日は粗大ゴミ収集の日で、出されているものは冷蔵庫、洗濯機、テレビ、布団、自転車、こたつ、カーペット、トタン、机、時計、傘、オモチャ、障子戸、乳母車、ソファ…中にはよく燃えそうな枯木まで。どこかの赤ちゃんにあげれば喜ばれそうなかわいい歩行器もあったけど、これも使い捨て時代のなせるわざか。これらは〝ゴミ〟としてトラックに積み上げられた。トラックはすぐにいっぱいだ。

ゴミをこぼれんばかりに満載したトラックは亀田町のゴミ焼却場（黒埼町、新潟市、亀田町、横越村の4市町村の広域清掃事務組合）に向かう。田んぼの真ん中にある焼却場は外観からは生産工場のように見える。だが、中に入って異臭と轟音に一瞬足がすくんでしまった。次から次へとトラックが焼却場の一角にある粗大ゴミ処理場に到着する。トラックから〝ゴミ〟がホッパーに落とされる。電化製品や家具に混ざって、チコという表札の付いた犬小屋を見つけた。なんだか悲しい。ホッパーが動き始め、〝ゴミ〟はほこりを巻き上げ、うめき、ひしめき、ベルトコンベアで破砕機へ送られて行く。わたしたちの文化的生活の末路といった光景だ。最後は焼却され煙になってしまうのだという。

係員から、5時間で75トンのゴミ処理ができることや操作はすべてリモコンであること、いろいろな衛生上の規則を守っていることなどを聞いた。もう十分わかったと思い外へ出た。空気がおいしかった。雨が降っていた。見上げると、焼却場の赤白だんだらの煙突が雨の中に憮然（ぶぜん）と立っていた。※ホッパー…貯蔵槽

（広報レポーター・安藤美智子）

粗大ゴミの収集は隔月ごとに行っている。町内を2トントラック3台で回るが、1日では全部積み込めず2日かかる。粗大ゴミ以外にも燃えるゴミ（週3回）、燃えないゴミ（空き瓶月2回、プラスチック月2回、空き缶金属類週1回）に分けて回収している。ゴミの処理にかかる経費は、年間1億5千万円ほど（広域清掃事務組合の負担金1億400万円、ゴミ収集の委託費4,800万円。いずれも本年度予算）。なお、上の写真は木場上組のゴミ置場